

高宮城跡 IV

—彦根市立高宮小学校校舎増改築工事に伴う発掘調査—



平成23年3月

彦根市教育委員会

目 次

例言

I はじめに	1
II 位置と環境	1
III 遺構と遺物	2
IV 調査の成果	15
V おわりに	16

写真図版

例 言

1. 本書は、彦根市より申請のあった彦根市立高宮小学校校舎増改築工事に伴って彦根市教育委員会が行った発掘調査の成果を収めたものである。
2. 本調査の調査地は、彦根市高宮町地先に位置する。
3. 本調査は、現地調査を平成22年4月8日～平成22年5月28日の間実施し、のちに整理調査を行った。
4. 本調査は、彦根市教育委員会事務局文化財部文化財課が実施した。調査の現体制は下記のとおりである。

文化財部長：谷口 徹	次長兼課長：上田 博司
課長補佐（兼史跡整備係長 兼文化財係長）：久保 達彦	
主 査：北川 恭子	主 任：深谷 覚
主 任：辻 嘉光	主 任：高木 絵美
主 任：池田 隼人	主 任：林 昭男
主 任：三尾 次郎	技 師：戸塚 洋輔
技 師：田中 良輔	技 師：下高 大輔
5. 本調査には以下の諸氏が参加した。

（発掘調査）池端 清、市田政子、大西 遼、榎木規秀、片山正範、片山悠太、川崎浄子、下山貴生、辻 節夫、友田 勇、仲田周平、西村朝男、野瀬善一、前田 宏、松岡信夫、八木宏明（五十音順・敬称略）

（整理調査）五十嵐由希、榎木規秀、仲田周平、八木宏明（敬称略）
6. 本書は田中良輔が執筆した。
7. 本書で使用した方位は、平面直角座標第Ⅳ系の真北に、高さは東京湾平均海面に基づいている。
8. 本調査で出土した遺物や写真・図面等は彦根市教育委員会で保管している。

I はじめに

本書は、彦根市立高宮小学校校舎の増改築工事に伴って実施した、高宮城跡（彦根市高宮町地先所在）の発掘調査成果をまとめたものである。調査は、平成22年4月8日から5月28日まで現地調査を実施し、その後、整理調査を行い本報告書の刊行となった。

II 位置と環境

〔地理的環境〕

調査地の所在する高宮町は、彦根市中央部を南東から北西方向に流れる犬上川の右岸、標高約97m～105m付近に位置している。犬上川は、河岸段丘を形成しながら犬上郡多賀町の榑崎付近を扇頂として、西北方向に広がる扇状地を形成している。

犬上川扇状地においては、標高約95m～100m付近が湧水ラインとなっているため、調査地点のやや西側には複数の湧水地が存在し、地理的下位に位置する北西部の水田地帯を潤している。

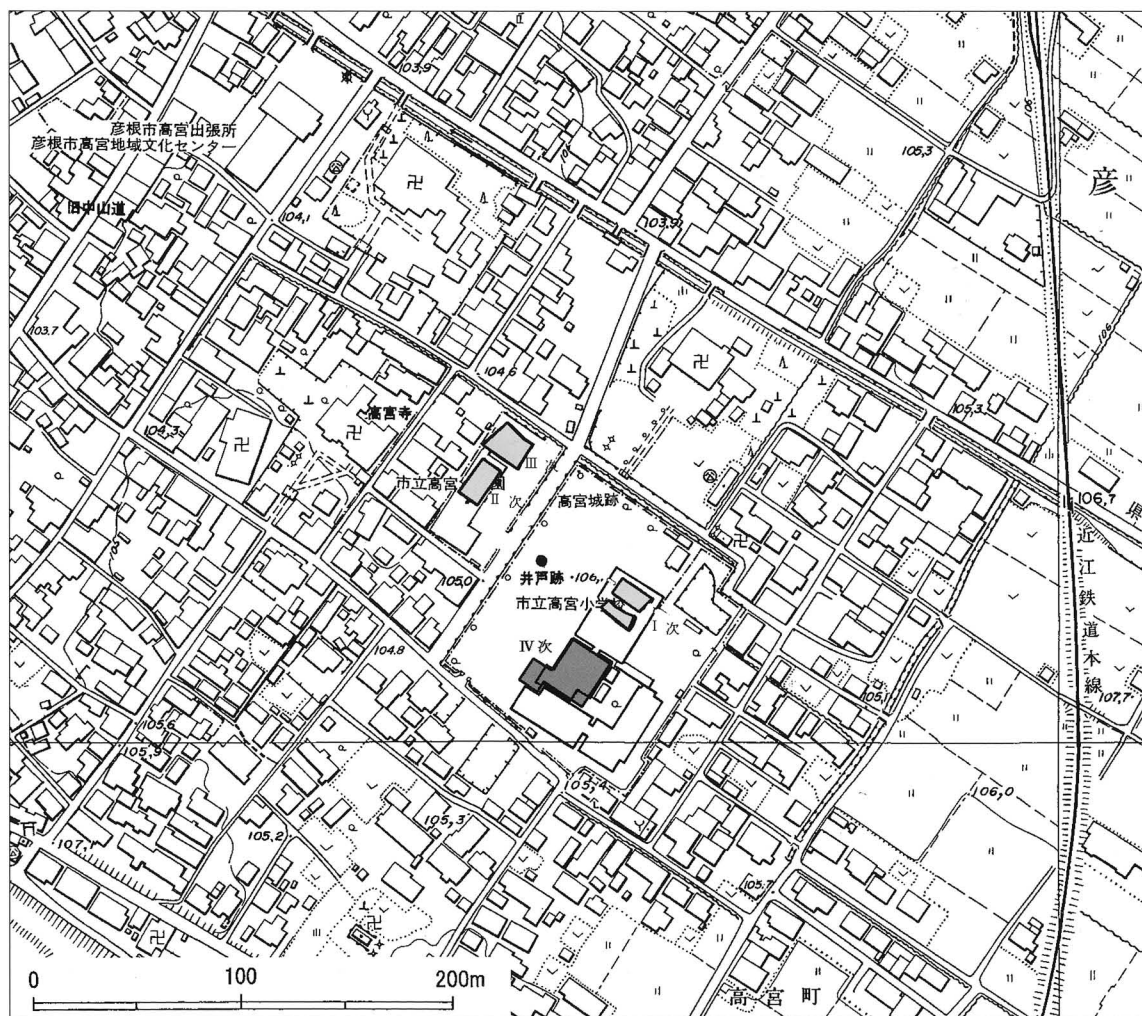


図1 高宮城跡位置図

〔歴史的環境〕

高宮城跡は、中山道高宮宿の南東部に位置している。西側には近世中山道が北東—南西方向へと縦走し、さらに多賀大社へと至る多賀道が、中山道から分岐して東へと伸びている。この分岐点一帯を中心として、街道沿いには宿場町が形成されており、現在でも文化元年（1804年）に描かれた「中山道高宮宿絵図」や明治時代初期に作成された「犬上郡高宮村地引絵図」と街区がほぼ一致するなど、かつての地割を良好に伝えている。

今回の調査地は、中山道から南東へ約300m、多賀道から南西へ約200mの地点に位置する。この一帯には戦国時代の城である高宮城が所在していたと伝わっており、過去3次にわたる発掘調査では、高宮城のあった16世紀頃の遺物や遺構が発見されている。

〔高宮城について〕

高宮城の歴史については、鎌倉時代後半に地頭として当地へ赴任してきた、紀州櫛^{いちい}氏の左衛門尉宗忠（?～1323年没）という人物から始まる。この宗忠は高宮姓を名乗り、以降4代目までが高宮城主を務めた。しかし、徐々にその勢力が衰えてくると、1417年には新たに佐々木氏の一族である六角氏頼の三男、信高が高宮城主として据えられることとなった。

この信高も高宮姓を名乗ったことから、紀州櫛氏の系譜は北殿高宮氏、佐々木氏の系譜は南殿高宮氏として呼び分けられている。以降、南殿の高宮氏は、初代信高の入城から1573年の高宮城廃絶まで、約156年にわたり高宮城主を務めることとなった。

高宮城の廃絶は、元龜争乱（1570～1573年）の末期、浅井長政の居城である小谷城が、織田軍によって攻め落とされた直後に訪れている。当時、高宮氏の当主高宮宗光は、浅井家の家臣として小谷城での戦いに参戦していた。しかし1573年8月28日、小谷城落城と同日に宗光は戦死。その子宗久は小谷城から逃げ延びたが、翌日高宮城へと帰還すると城に火を放ち、一族は離散した、と伝わっている。

Ⅲ 遺構と遺物

基本層序

今回の発掘調査地点においては、小学校敷地の造成に伴う整地層が約150cmあり、その下部において、地山Ⅰ・地山Ⅱ・地山Ⅲの各堆積層を確認した。

地山Ⅰは細粒砂を少量含む黄褐色土層で、遺構面から-20～30cmの厚さで堆積しており、調査区全域の地山面を成す。今回検出した遺構は、全てこの層の上面から切り込んでいた。

地山Ⅱは極めて均質な粒子からなる暗褐色粘質土で、調査区全域において、遺構面-30～60cmの厚さで堆積している。

地山Ⅲは砂礫を多く含む黄褐色土である。この層については、主に調査区の北西側、遺構検出面-60cm以下において検出している。調査区東側の同程度の深度では検出できなかったため、地点によって偏りをもって分布する層であると思われる。



図2 遺構配置図

検出遺構

発掘作業は、地表面から約150cm余の造成土を除去したのち、地山 I 上面において遺構の検出を行った。その結果、溝10条、土坑8基、掘立柱建物2棟、柵列1条、ピット群などを検出したが、その大半は旧校舎の基礎による攪乱や、上面の削平を受けており、個々の詳細については不明な点も多く見られた。以下、各遺構について詳述する。

柵列

SA01 (図2)

SA01は、周辺地割りに平行して北東－南西方向に構築された柵列である。柱穴間は、1間約2.0～2.1mで統一されており、後述する掘立柱建物などと同様の規格を示している。

柵列は、調査区北東端部から約4.5m南西の地点付近で一旦途切れており、その延長約5.5m先の地点から調査区の南西端までの間において、再び検出している。

掘立柱建物

SB01 (図3)

平面規模については、北西側が調査区外へと伸びているため、全容は不明である。把握できている規模としては2間×1間以上となっている。また、1間の規格は柵列と同様に2.0～2.1mを示す。また、これに関連する柱穴からは微小な炭化物や径2～3cm程度の焼土塊が多く出土しており、他の小穴群に見られない特徴を示している。

SB02 (図4)

平面規模は2間×1間(4.2m×2.5m)で、北東－南西方向を長軸として構築されている。1間の規格は概ね2.0～2.1mとなっており、これを構成する柱穴の底部には、一部礎板石が残存する。

溝

SD01 (図2)

当地周辺の地割りに平行し、北西－南東方向に伸びる、石列を伴う溝である。溝の深さは最大約15cmで、残存する埋土は灰色粘質土からなる単層であった。石列は溝の護岸であると思われるが、上部を大きく削平されているために詳細は不明である。

SD02 (図7)

周辺の地割りに平行し、北東－南西方向に伸びる溝である。内部からは炭化物とともに土師器皿片が多く出土しており、これらの廃棄に際し、人為的に埋められたものと思われる。

SD03 (図2)

当地周辺の地割りに平行し、北西－南東方向に伸びる溝である。上部を削平されており、残存深度は約8cmを測る。埋土は灰色粘質土の単層であった。

SD04 (図2)

当地周辺の地割りに平行し、北東－南西方向に伸びる溝である。上部を大きく削平されており、残存深度は約10cmを測る。埋土は灰色粘質土の単層であった。

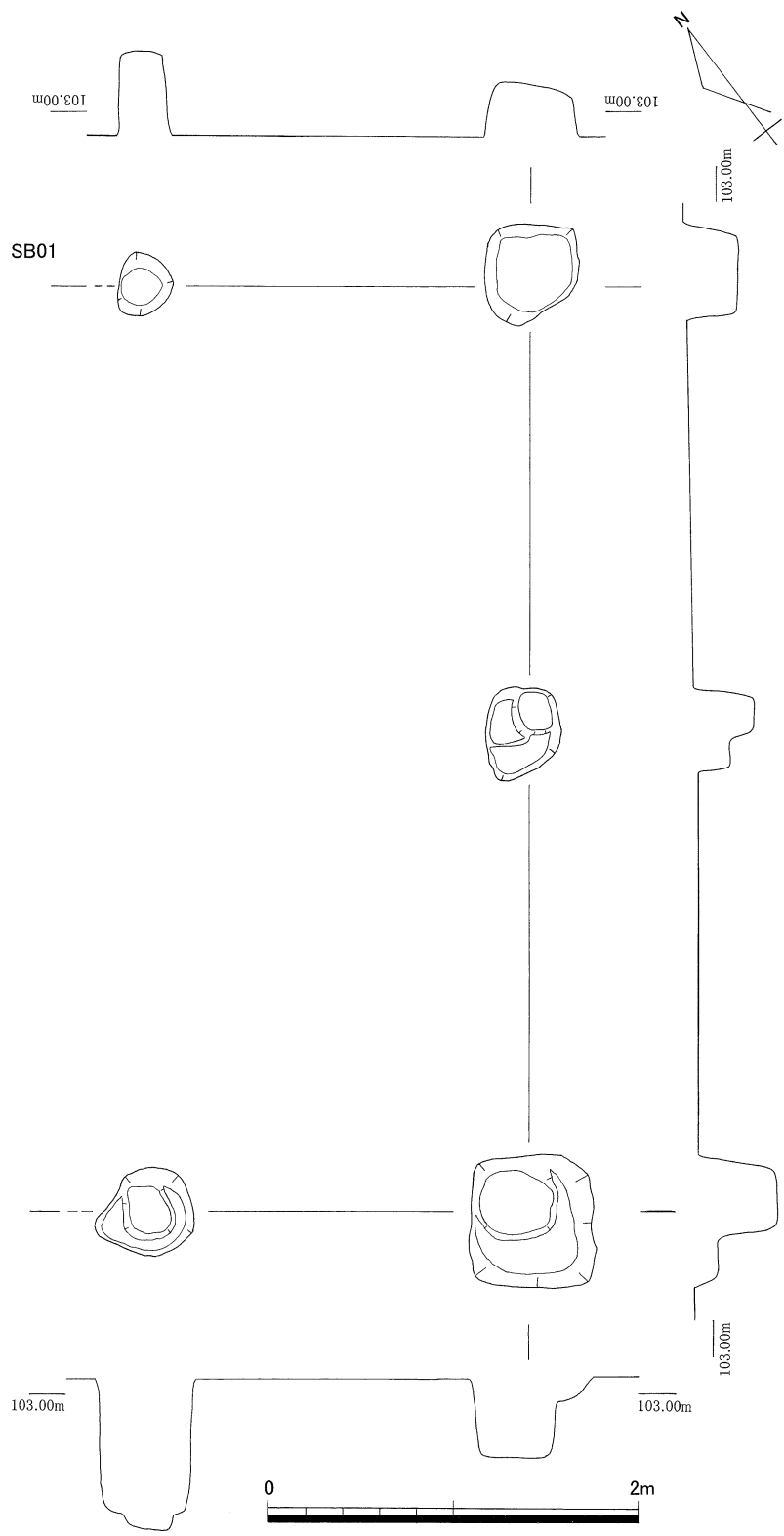


图 3

SD05 (図2)

当地周辺の地割りに平行し、北東－南西方向に伸びる溝である。内部からは土師器皿の小破片が少量出土している。埋土は灰色粘質土の単層で、残存深度は約10cmを測る。

SD06 (図2)

当地周辺の地割りに対し、わずかに南東方向へ軸を振る溝である。SD05を切り、SK02・03を切る。埋土は灰色粘質土の単層で、残存深度は約15cmを測る。

SD07 (図6)

当地周辺の地割りに平行し、調査区の北端部においてL字型に約90°屈曲する溝である。上部に削平を受けており、残存幅は最大約1.6m、最大深度は約70cmを測る。溝の底面は地山Ⅱの暗褐色粘質土の下層にある砂礫層の上面に合わせて平坦に整形されており、底部幅は最大約1.0mを測る。断面は逆台形状を呈し、溝の壁面は約60°～70°の角度で、底部から直線的に立ち上がる。

埋土の堆積状況としては、土層断面の上半部において、ブロック土を多く含む層を検出している。また下半部から底部付近では軟弱な粘質土の堆積が見られることから、下層においては自然堆積、上層では人為的な埋め戻しが行われたものと思われる。

SD08 (図6)

当地周辺の地割りに平行する溝である。残存幅は最大約1.2mを測り、残存深度は最大約50cmを測る。SD07の西側に隣接・平行して検出しているが、屈曲はしていない。

埋土の堆積状況については、SD07と同様、上層においてはブロック土を含む人為的な堆積、下層においては軟弱な粘質土からなる自然堆積となっている。

SD09 (図2)

当地周辺の地割りに対し、やや南へと軸を振る溝である。上部を削平されており、残存深度は約10cmを測る。

SD10 (図2)

当地周辺の地割りに対して、やや南へと軸を振る溝である。上部を削平されており、残存深度は約10cmを測る。SD09とは、約4m程度の間隔で平行している。

土坑

SK01 (図6)

平面プラン隅丸方形を呈する土坑である。側辺の1辺に攪乱を受けているため全容は不明であるが、残存規模は長軸約1.7m×短軸約1.0mを測り、深さは約70cmを測る。また、遺構の主軸は周辺の地割りに一致する。

SK02 (図7)

平面プラン隅丸方形を呈する土坑である。側辺の1辺に攪乱を受けているため全容は不明であるが、残存規模は長軸約3.3m×短軸約1.8mを測り、深さは約50cmを測る。

この土坑の内部からは、方形プランを意識した石列を検出しており、おそらく内部に空間

を確保するための護岸であったものと思われる。

SK03 (図7)

平面プランは、側辺3辺をSK02および攪乱によって切られているため不明であるが、概ね隅丸方形を呈するものと思われる。残存規模では、長軸約2.2m×短軸約1.0mを測り、深

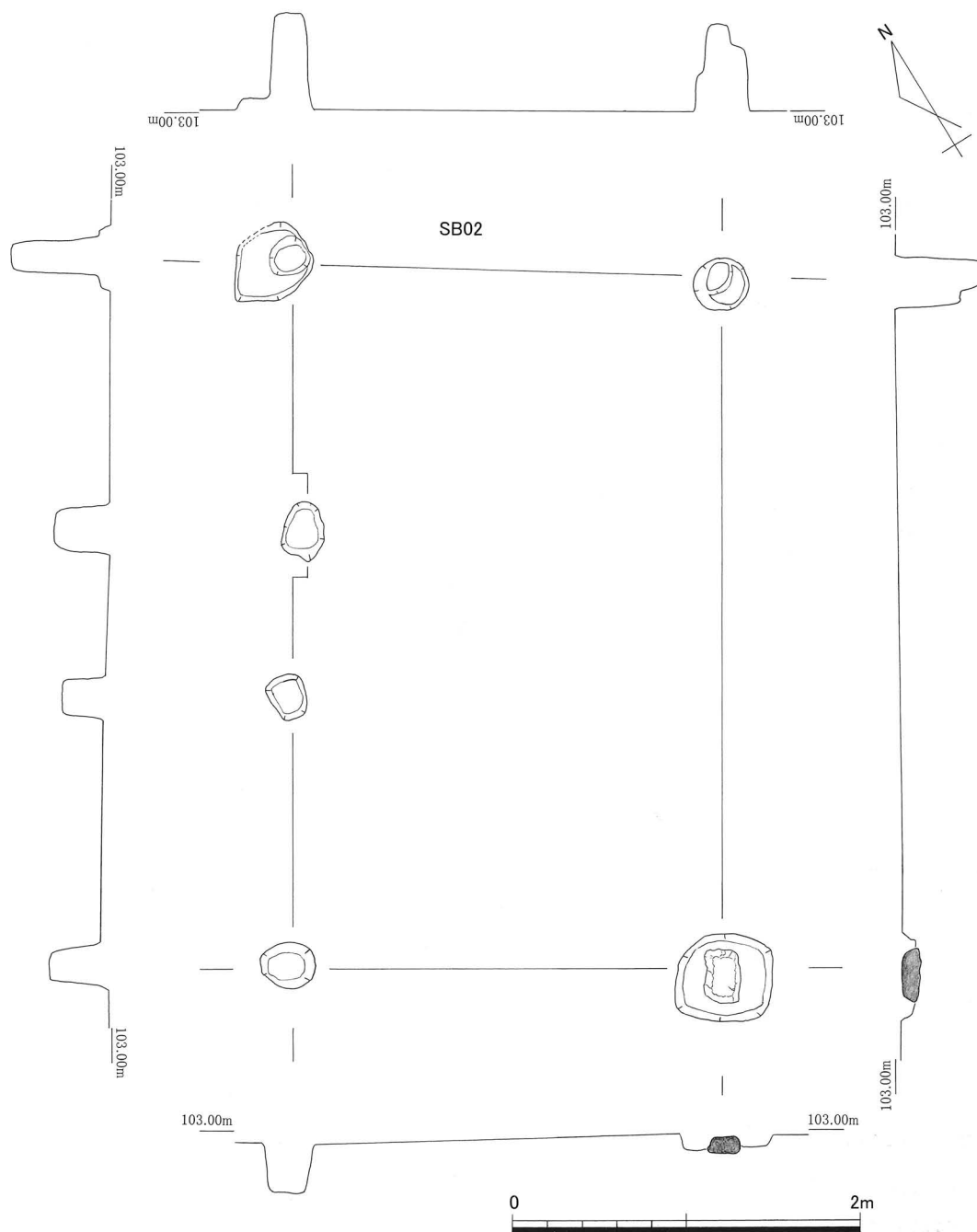


図4

さは約60cm、内部には1段のテラスが付く。
また、主軸は周辺の地割りに一致する。

SK04 (図7)

平面プラン隅丸方形を呈する土坑である。
規模は長さ約2.2m×短軸約2.0mを測り、深さは約30cmを測る。土坑内部からは石列を検出しているが、この主軸は土坑の主軸に対して約40°角度を北側へと振る。

SK05 (図5)

遺構の北東部を攪乱に切られているため全形は不明であるが、概ね隅丸方形を呈すると思われる土坑である。残存規模は長軸約1.3m×短軸約0.9mを測り、深さは約30cmを測る。内部にはSK02・04と同様に石列を有しているが、他の2基に比べてやや小型の土坑となっている。遺構の主軸は周辺地割りと同様の軸を指向している。

SK06 (図2)

平面プランは隅丸方形を呈する浅い土坑である。上部を削平されており、残存規模は長軸約2.5m×短軸約2.1m、深さ約6cmを測る。

SK07 (図5)

平面プランは隅丸方形を呈する浅い土坑である。規模は長軸約1.5m×短軸約1.2mを測り、深さは約15cmを測る。

SK08 (図2)

平面プランは隅丸方形を呈する浅い土坑である。規模は、長軸1.1m×残存幅0.7mを測り、深さは約20cmを測る。

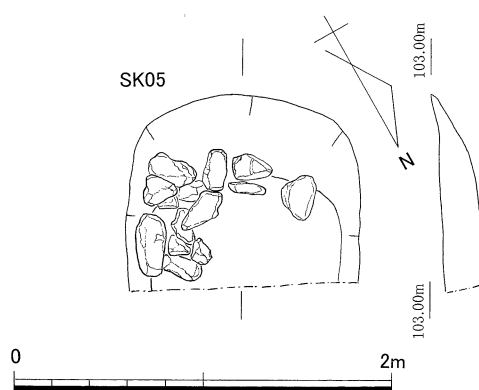
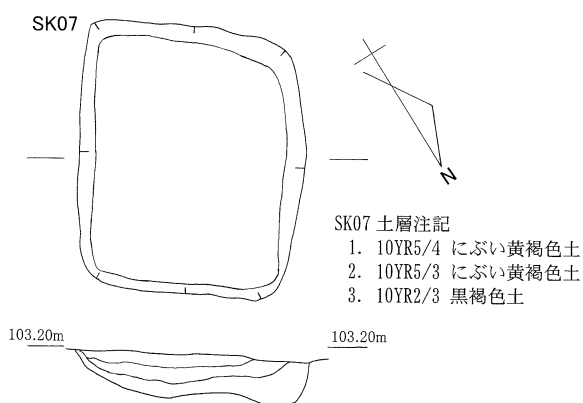


図5

出土遺物

出土遺物については、概ね13世紀・14世紀代を中心として、16世紀頃までの遺物が出土している。しかし、遺物の大半は小破片であったため、全体形状および時期を明らかにしえないものが多くみられた。以下、出土遺物について、遺構別に概要を述べる。

SD01

瓦質土器の体部片が出土している。形状から、奈良火鉢の風炉と推定できるが、詳細な時期を判断するには至らなかった。

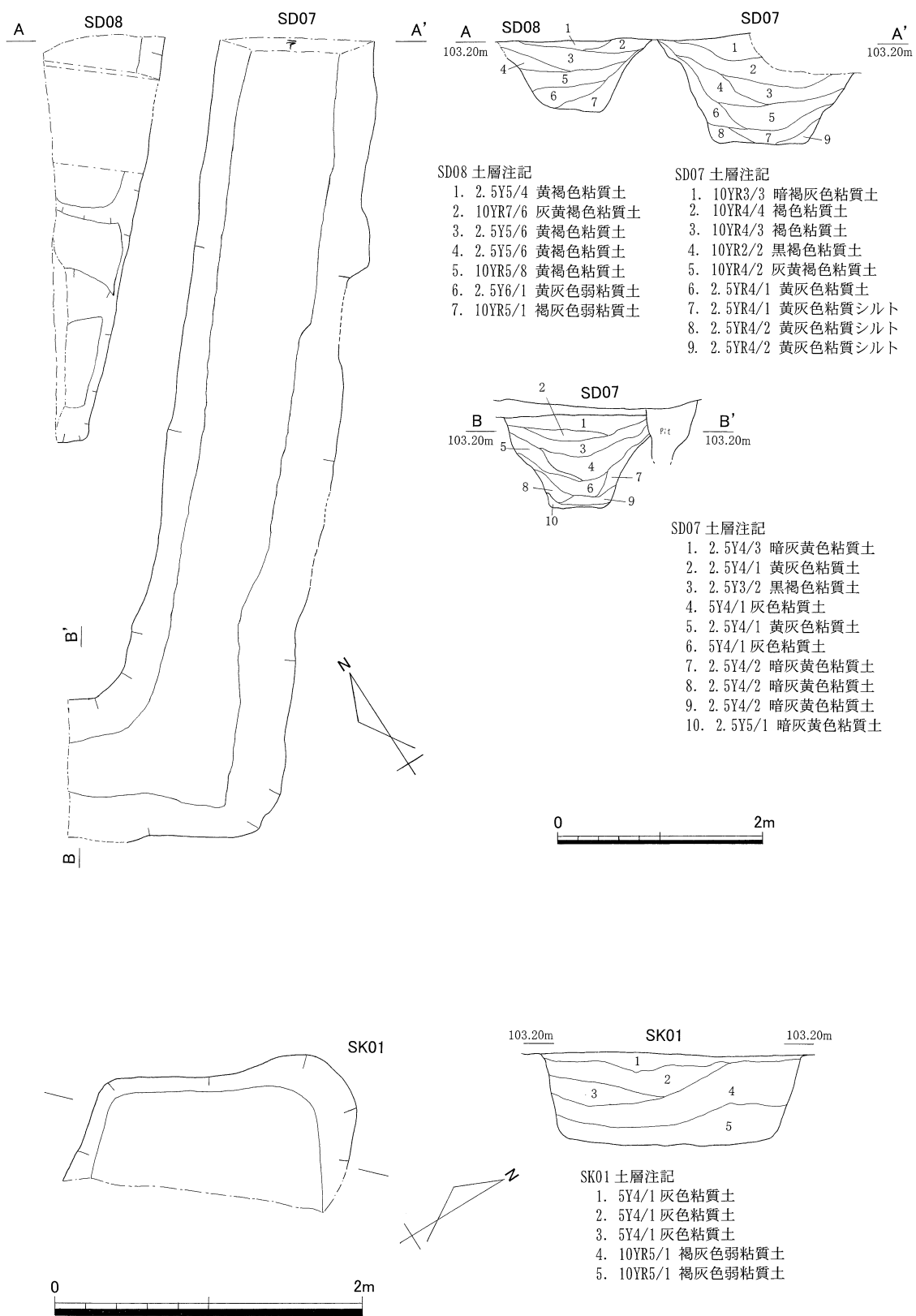
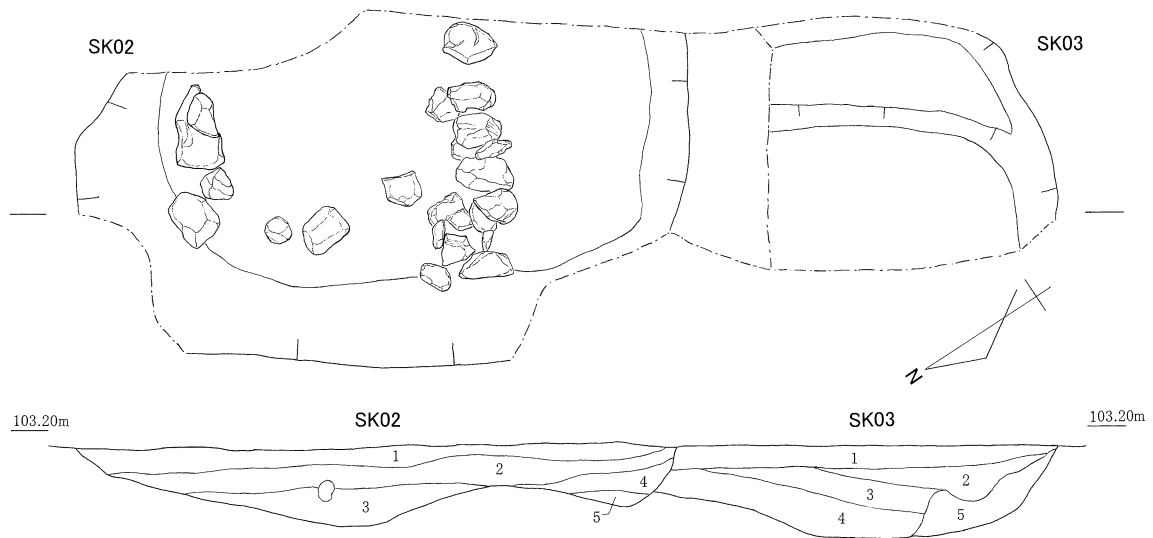


図6

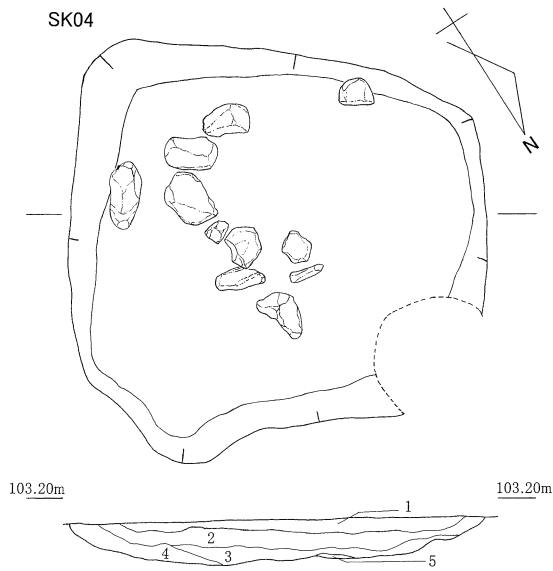


SK02 土層注記

1. 5Y4/1 灰色粘質土
2. 10YR5/1 褐灰色弱粘質土
3. 5Y4/1 灰色粘質土
4. 5Y4/1 灰色粘質土
5. 10YR4/3 褐色粘質土

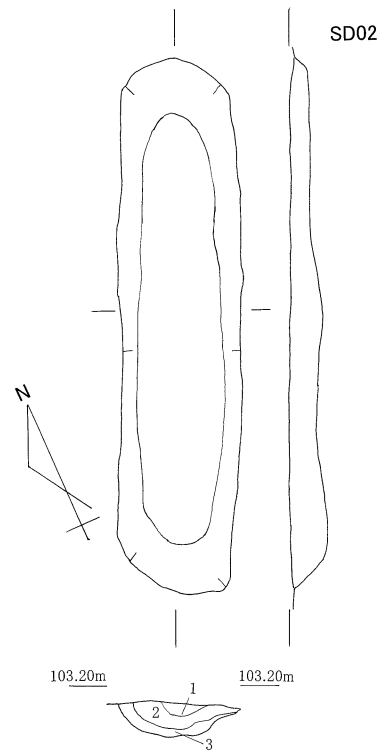
SK03 土層注記

1. 5Y4/1 灰色粘質土
2. 5Y5/6 黄褐色粘質土
3. 5Y4/1 灰色粘質土
4. 10YR5/1 褐灰色弱粘質土
5. 10YR5/1 褐灰色弱粘質土



SK04 土層注記

1. 7. 5YR7/1 明褐灰色土
2. 7. 5YR6/4 にぶい橙色土
3. 7. 5YR4/1 褐色土
4. 7. 5YR5/1 褐灰色土
5. 7. 5YR3/3 暗褐色土



SD02 土層注記

1. 10YR5/4 にぶい黄褐色土
2. 10YR5/3 にぶい黄褐色土
3. 10YR2/3 黒褐色土



図 7

SD05 (図9-1, 2)

土師器皿・青磁碗の口縁が出土している。青磁碗については、龍泉窯系の輸入陶磁器と考えられ、口縁端部は弱く外反し、一部釉薬が非常に薄い箇所がある。形態的な特徴から、概ね13世紀中頃から14世紀中頃の所産と思われる。

SD07 (図9-3, 4, 5, 11, 12)

土師器皿の小破片を主体として、古瀬戸播鉢・瓦質焙烙などが出土している。古瀬戸の播鉢については口縁部付近のみの破片であるが、概ね15世紀初頭から中頃にかけての所産であると思われる。また、瓦質の焙烙については、その形態および内面を刷毛目調整後、口縁直下のみ横方向にナデ調整を施しているという特徴から、16世紀後半～末頃の所産と考えられる。

SK02 (図9-6, 8, 13, 14, 15, 16, 17)

土師器皿および白磁碗が出土している。白磁碗については、腰部から口縁部にかけて緩く外反し、口縁端部のみ釉剥ぎしている。これらの特徴から、13世紀中頃から14世紀前半にかけての所産であると考えられる。土師器皿については、小破片のほか、口径を復元しうものが6点出土している。復元径は、10.0cm前後のものを中心として、口径約13.0cmを測る一回り大きなものが1点出土している。器高については、いずれも約2.2cm前後を測り、大きな差は見られない。形態的な特徴としては、①器壁が薄く、体部半ばから口縁端部までを大きく外反させる、へそ皿に近い形態を呈すると思われるもの、②器壁がやや厚く直線的な体部を持ち、口縁はナデ調整により丸く収めるもの、③器壁がやや厚く直線的な体部を持つもので、ナデ調整により口縁を外反・肥厚させるもの、などの3種が認められる。

上記の土師器皿類については、近江地域では概ね15世紀以降に見られるようになる。先述の白磁碗は、13世紀中頃から14世紀前半の所産であるため、切り合い関係にあるSK03からの混入品である可能性が高い。

SK03 (図10-19, 20)

土師器皿のほか、青磁碗、瓦質風炉などが出土している。青磁碗については龍泉窯系の輸入陶磁器であり、形態的特徴からは13世紀末～14世紀中頃の所産であると考えられる。また、瓦質の風炉については、いわゆる奈良火鉢と呼ばれるものであり、その形態的特徴から、青磁碗と同じく13世紀末～14世紀中頃の所産と考えられる。

SK04 (図9-9, 10, 18)

土師器皿のほか、天目茶碗などが出土している。天目茶碗については、底部片のみの出土となっているために正確な時期の特定は難しい。しかし、①高台は浅い削り出しの輪高台であり、②高台脇に極めて浅い段が付き、③底部周辺に濃い錆釉を施す、などの特徴を持つことから、瀬戸美濃の大窯期、概ね15世紀末から16世紀前半にかけての所産であると推定される。

P14 (図10-21)

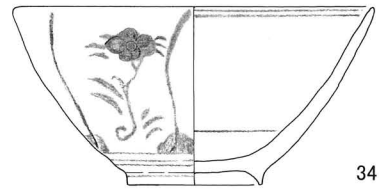
古瀬戸の取手付片口が出土している。注口部分は欠落しているが、取手及び口縁の形状から、概ね14世紀後半の所産であると考えられる。

遺構面採集資料 (図8-34, 35 図9-7)

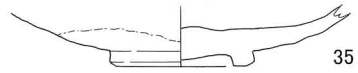
(図10-27, 28, 31, 32, 33)

遺構面採集資料には、土師器皿、白磁皿、古瀬戸播鉢、卸皿、平碗、鉄釉花瓶、瓦質火鉢(浅鉢)などがある。このうち白磁皿については、底部付近のみの出土であるが、①高台畳付部分が外に向かって斜めに削られ、②底部は露胎、③釉調はやや黄味がかかった白色を呈し、④器壁がやや薄く端正な作りであるという特徴から、10世紀後半から11世紀中頃の輸入磁器であると考えられる。また、その底面には朱書で「一」の文字が書かれていた。

古瀬戸播鉢については、口縁の形態からSD07から出土しているものと同様、概ね15世紀初頭から中頃にかけての所産であると推定できる。また、卸皿・平碗については、概ね14世紀末から15世紀初頭と推定される。鉄釉花瓶および瓦質火鉢については、13世紀末から14世紀中頃の所産と考えられる。



34



35

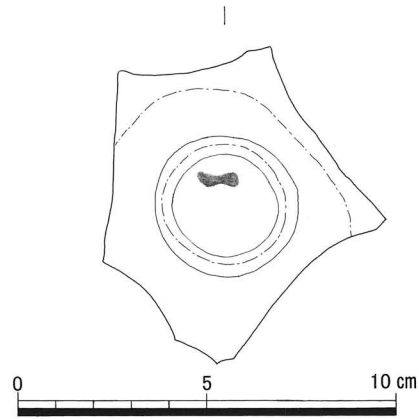


図8

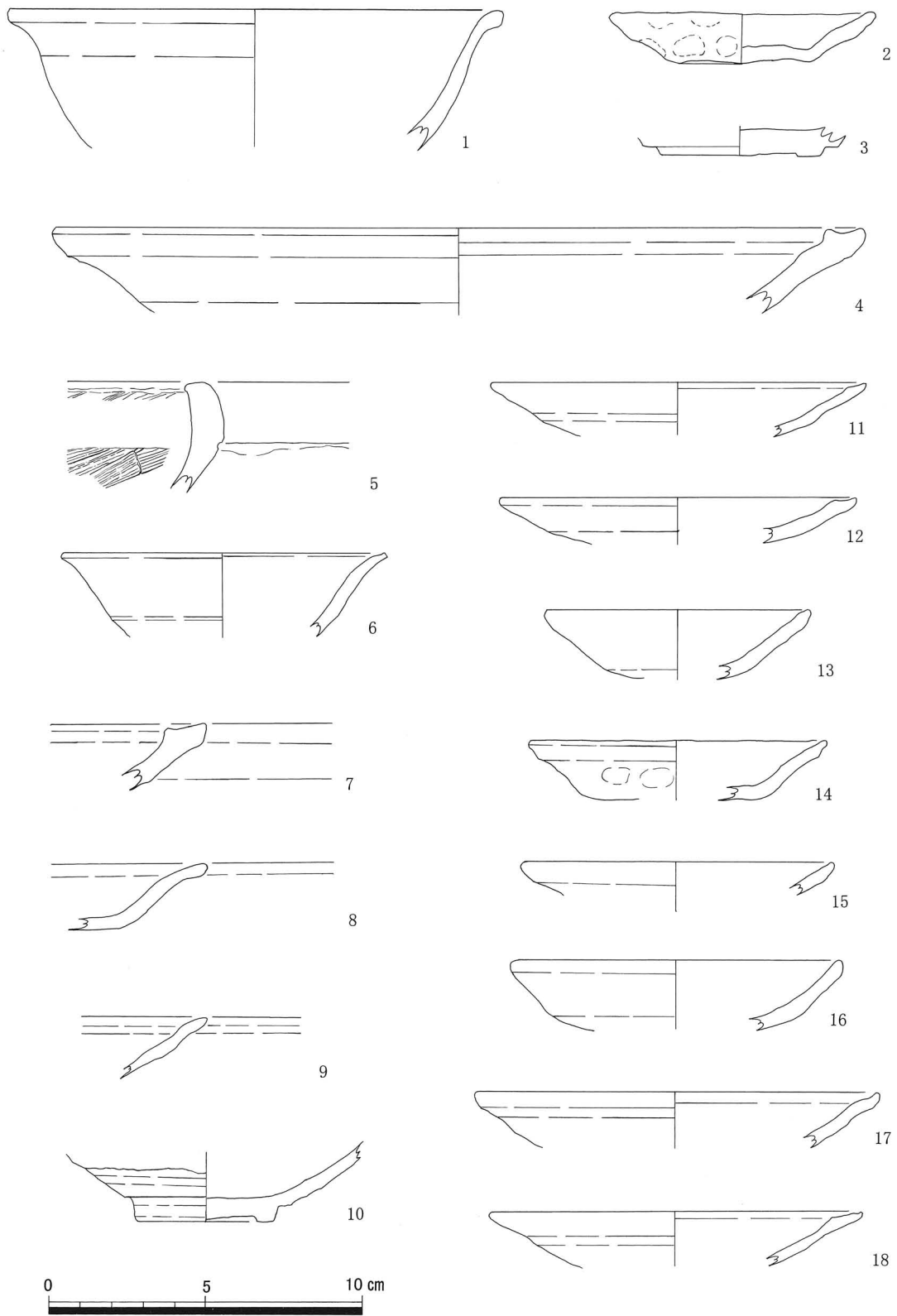


图 9

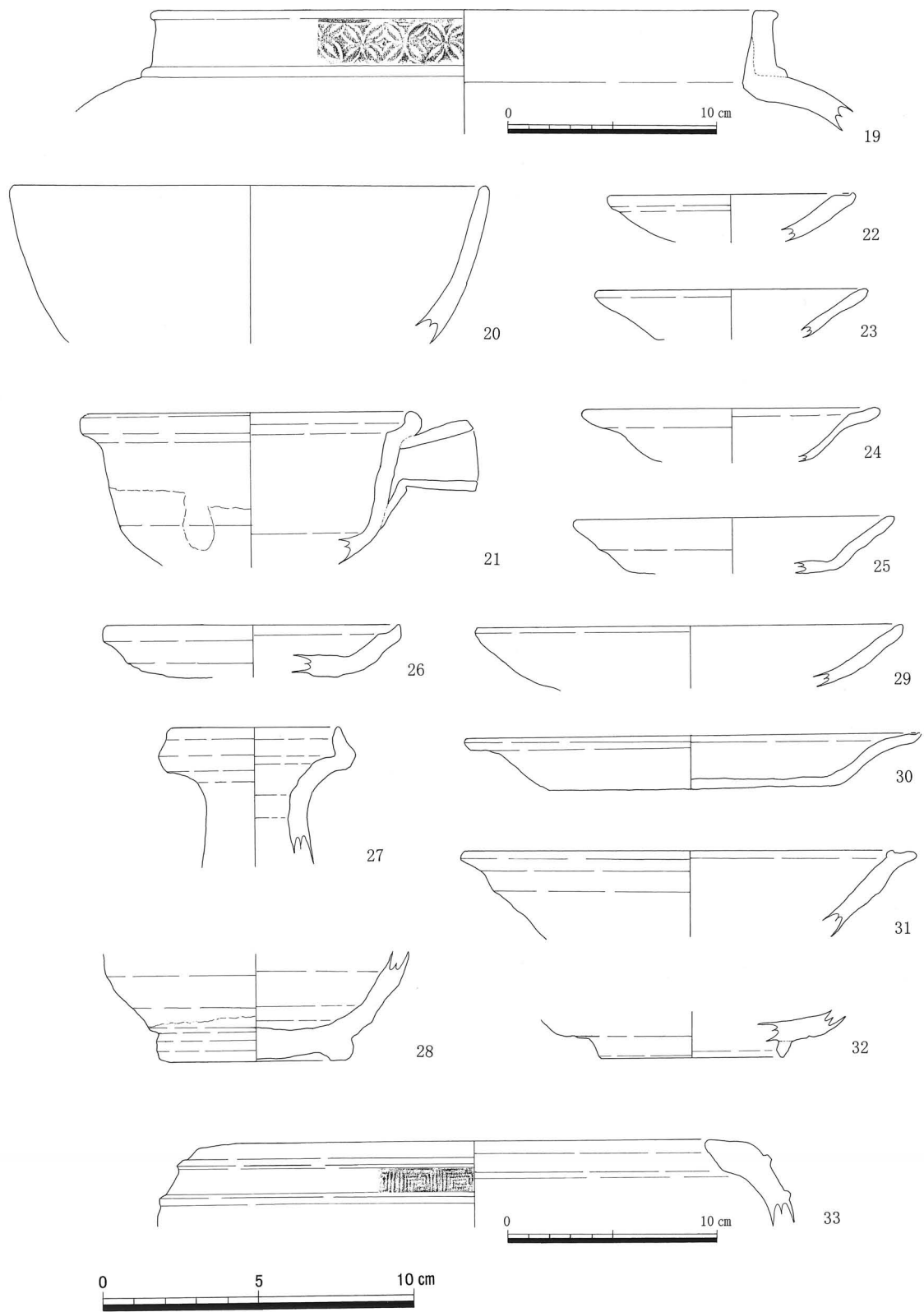


图10

IV 調査の成果

1. 柱間の規格について

今回の調査では、柵列・掘立柱建物などにおいて、各柱穴間の幅を約2.0m～2.1m程度とする規格が見られた。これについては掘立柱建物や柵列などの構造物以外にも、各遺構間の距離など、周辺の区画構成に対しても適用されているものと思われる。

具体例として、ほぼ同一の地点に位置するSD07とSB01について、重複する2つの遺構の南角を起点として考えると、SA01との間には幅約4m、またSD01との間には、幅約12mの空間が存在しており、いずれも2mの倍数で構成された区画となっている。

周辺の街区を見てみると、江戸時代に描かれた「中山道高宮宿絵図」（1804年）にも描かれ、現在まで残っている道の中には、幅約4mの規格を持つものが複数本見られ、今回検出した遺構群との共通性が窺える。今回の調査区内においては、先述のSD07-SA01間の距離が約4mを測ることから、これが通路としての空間であった可能性もある。

2. 溝について

高宮城跡においては、過去3次にわたる発掘調査が行われてきた。1次調査は昭和58年度、2次調査は昭和59年度、3次調査は平成18年度にそれぞれ実施されており、各地点においては、いずれも溝を数条検出している。これらの溝については、高宮城の堀、あるいは区画溝として考えられてきた。しかし、各遺構内からは高宮城との関係を示すような遺物は出土しておらず、その構築年代については不明であった。

しかし、今回検出したSD07では、埋土中から16世紀後半頃の焙烙が出土しており、かつそれ以降の時期の遺物は皆無であったため、高宮城と同時期に存在していた可能性が高い。

またL字に屈曲しているという点から、何らかの区画の中心部が、この屈曲の内側である北西側において展開している可能性が指摘できる。

3. 土坑について

検出した土坑8基のうち、3基については内部に石列を有していた。ほぼ同時期の遺跡である彦根市日夏町所在の古屋敷遺跡においても類似する遺構が検出されている。用途としては、内部に空間を作り出す構造となっている点から、貯水・貯蔵用の施設である可能性が考えられる。

4. 柵列について

SA01については、南西から北東にかけて、調査区を縦断する形で検出している。SD07と平行するように作られており、空間を区画するための施設であると思われる。

また、調査区南端から中央付近までは1間2.0m前後の間隔で伸びてくるが、ピット群の密度が高くなる調査区北東付近になると、幅にやや乱れが生じる。この地点においてはSB02及び関連すると思われるピット群を検出していることから、柵列とそれに取り付く施設として、何らかの関係があった可能性も考えられる。

V おわりに

各遺構の時期については、SD05・SK03が13世紀末～14世紀中頃と最も古く、SD06が14世紀末～15世紀中頃、SK02が15世紀初頭～16世紀初頭、SK04が15世紀末～16世紀前半、SD07が16世紀初頭～16世紀後半となっている。また、切り合い関係や周辺の遺物出土状況などから、SD08・SB01については15世紀中頃～16世紀末頃、そしてSB02については上限が不明ながら、古瀬戸の卸皿の一部が出土していることから、下限は15世紀末頃と推定される。

高宮城においては、13世紀末～14世紀前半にかけて、北殿初代の宗忠がこの地へとやってくる。その後、北殿高宮氏が4代にわたり城主を務めるが、14世紀後半頃には勢力が衰え、15世紀初頭には南殿の信高が登場、そして16世紀後半、小谷城落城の翌日に高宮城は廃絶する。

こうした背景を踏まえると、今回検出した各遺構は、北殿高宮氏初代の宗忠が補任した時期以降、高宮城廃絶に至るまでの期間に限られている。また遺物についても、10世紀後半に遡る古い時期の白磁皿1点や、近世でも江戸時代後期の染付碗数点のほか、他の時期の遺物はほとんど出土していない。

これらのことから、今回の調査地点においては、13世紀末に北殿高宮氏が入部してきた頃に本格的な土地の利用が始まり、高宮城に関連した施設群が16世紀末頃まで営まれた後、17世紀、江戸時代後期に至るまで、ほとんど土地利用がされていなかった状況が推定される。

これまでに発見されている遺構との関係については、各地点間の距離が遠いため、明確なことは言えないが、概ね五社川の南西、高宮幼稚園の南東、高宮小学校校舎・体育館の北西、すなわち現在の高宮小学校校庭部分に、高宮城の中心領域を求めることができるものと考えられる。

しかし、未だその推定を裏付ける要素は少なく、今後の資料増加に期待したい。

〔参考文献〕

- ・藤澤良祐2008『中世瀬戸窯の研究』
- ・彦根市教育委員会2007『高宮城跡Ⅲ』彦根市埋蔵文化財調査報告書 第39集
- ・木戸雅寿1989「近江における15～16世紀の土器について」
『中近世土器の基礎研究Ⅴ』日本中世土器研究会
- ・山本信夫1988「北宋期貿易陶磁器の編年 大宰府出土例を中心として」
『貿易陶磁研究No.8』



調査地東半部全景〔南西より〕



調査地南西隅部〔南東より〕



調査地西半部全景〔南西より〕



SD02完掘状況〔北東より〕



SD02土層断面〔北西より〕



SD07完掘状況〔南より〕



SD07北東壁土層断面〔南より〕



SD07北西壁土層断面〔南東より〕



SD08完掘状況 [南より]



SD08土層断面 [南西より]



SK01完掘状況 [南東より]



SK01土層断面 [南東より]



SK02完掘状況〔北西より〕



SK02土層断面〔北より〕



SK04完掘状況〔北西より〕



SK04土層断面〔北西より〕



SK05完掘状況 [南東より]



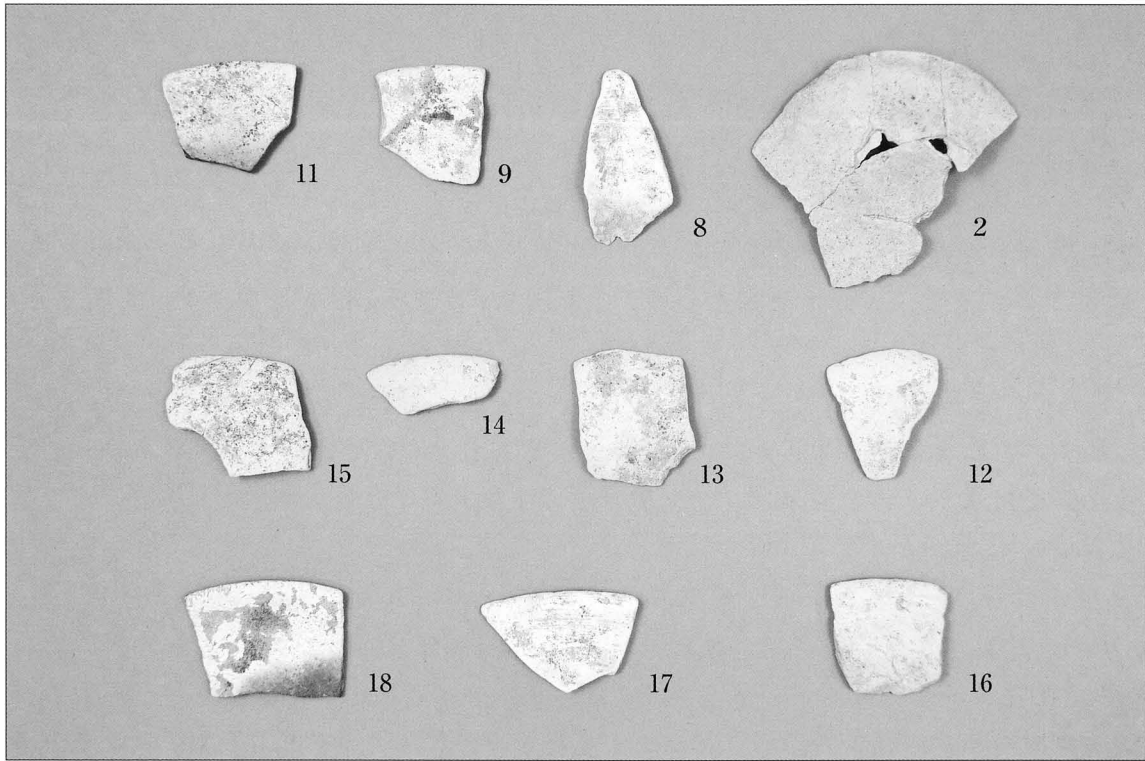
SK05土層断面 [北より]



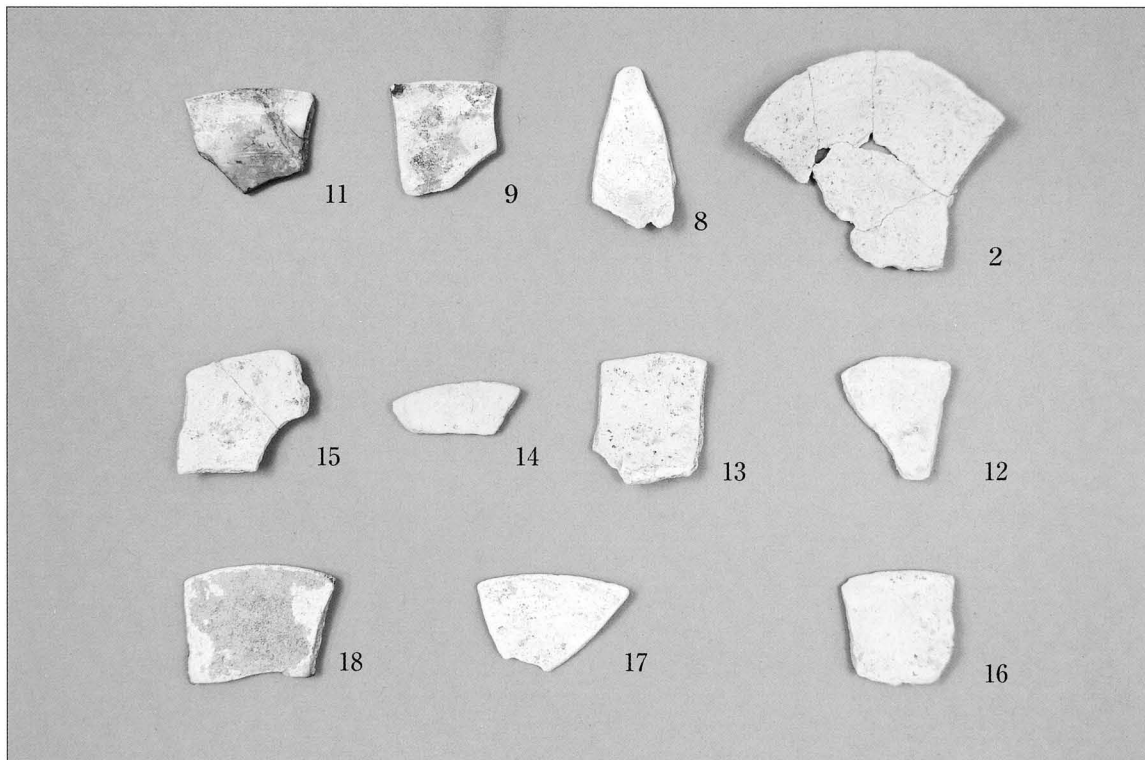
SK07完掘状況〔北東より〕



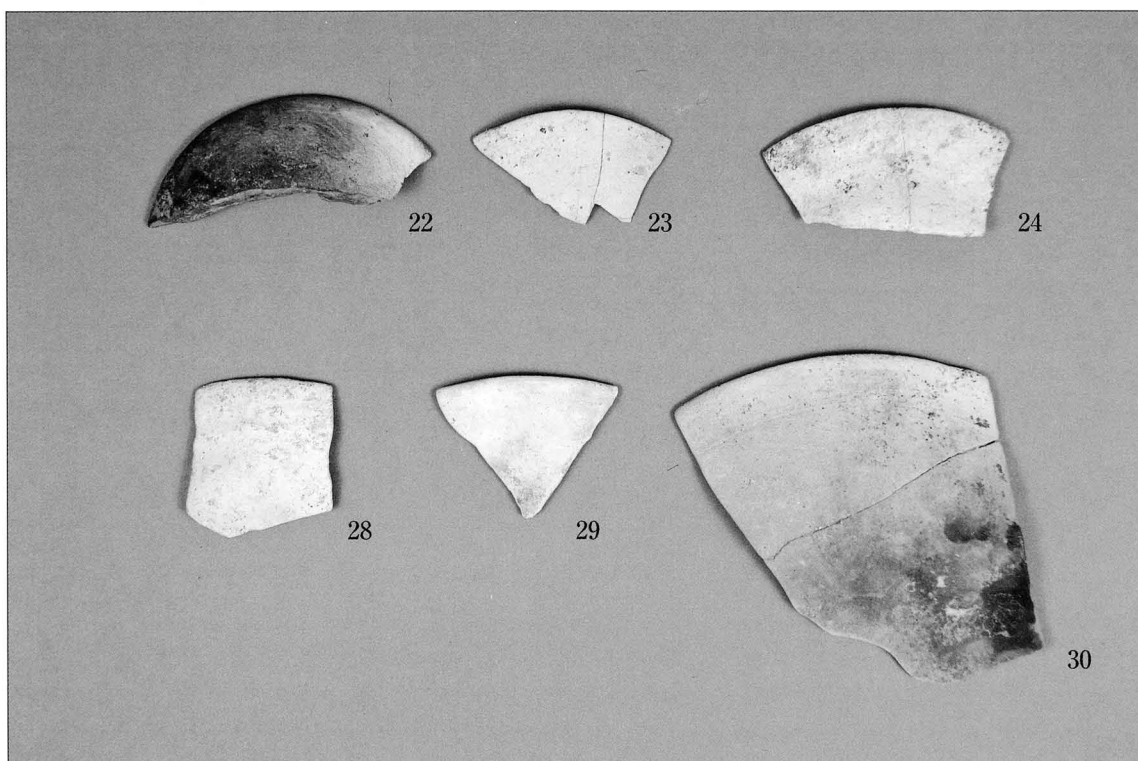
SK07土層断面〔北東より〕



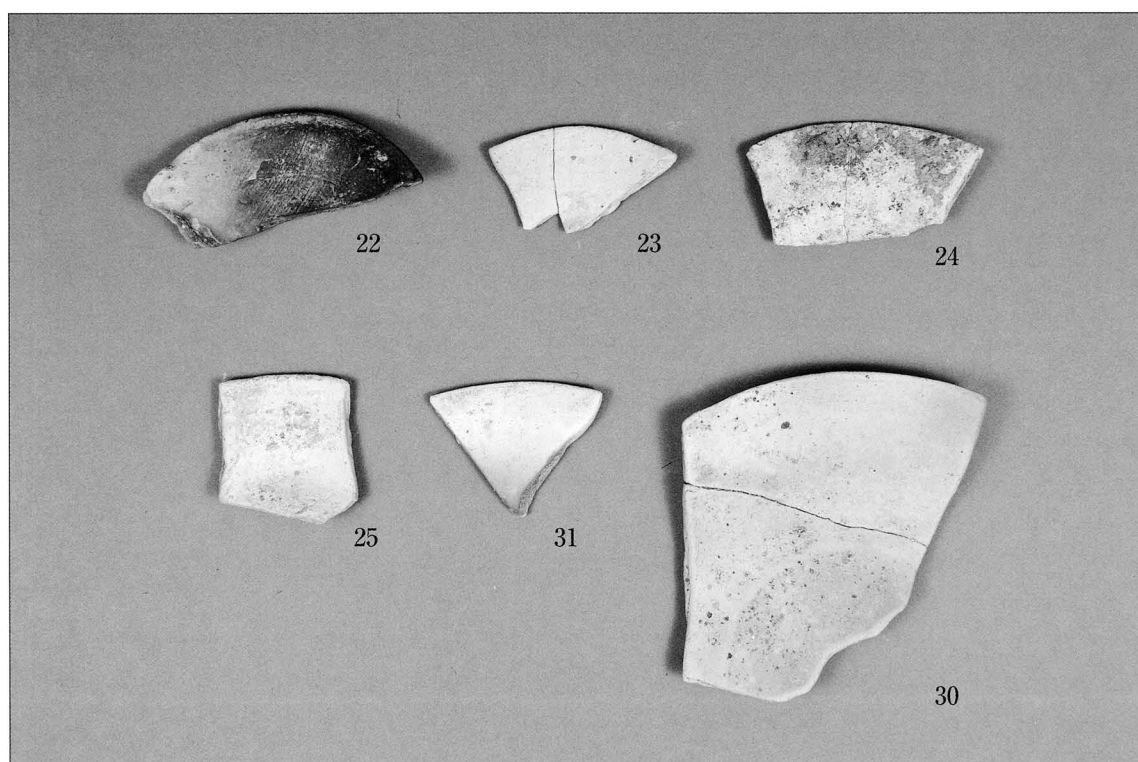
出土遺物



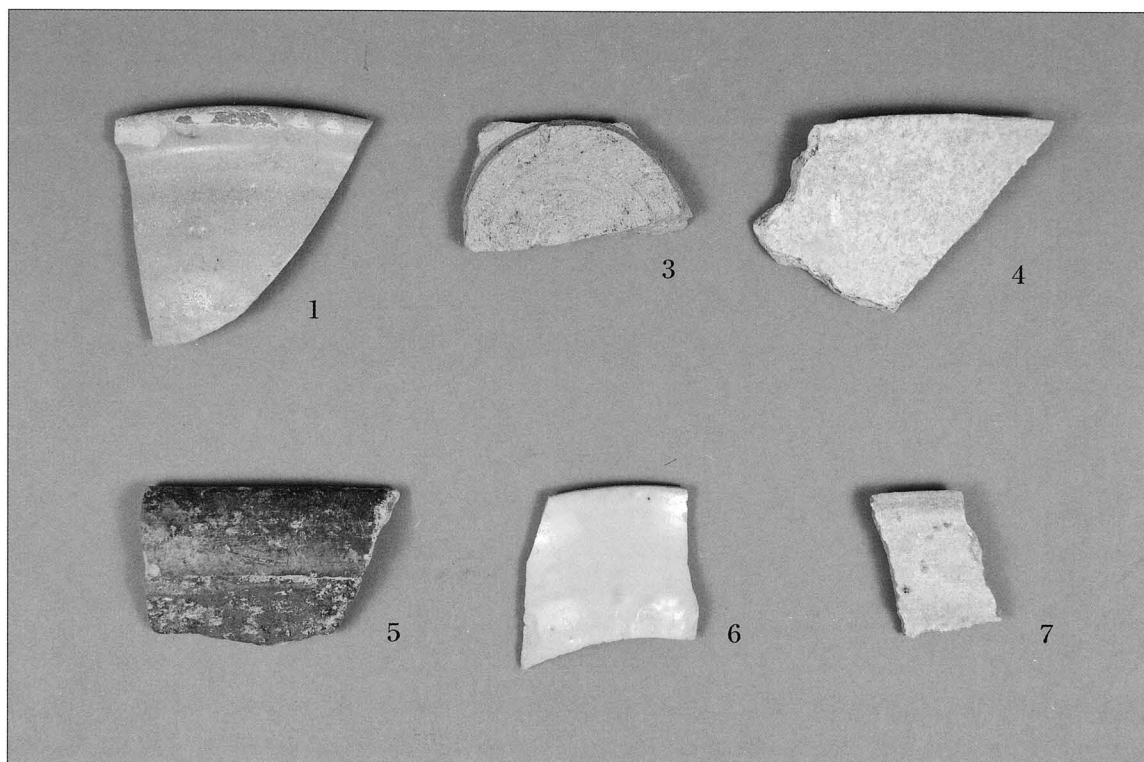
出土遺物



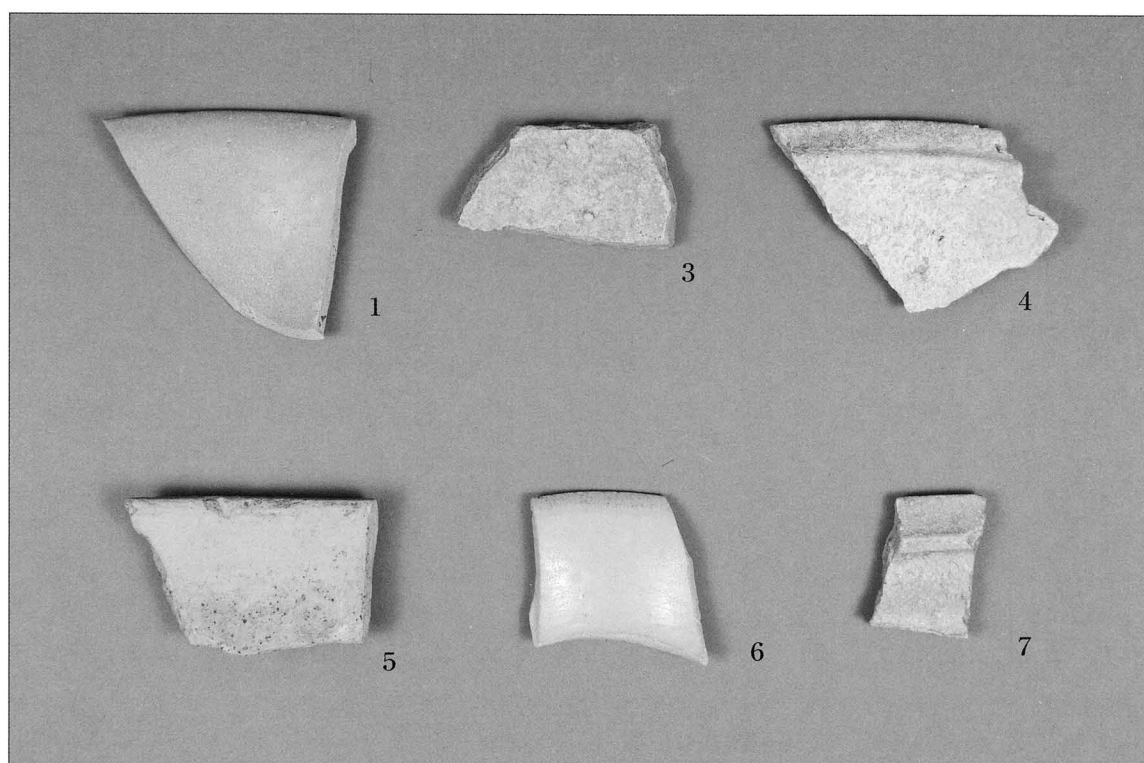
出土遺物



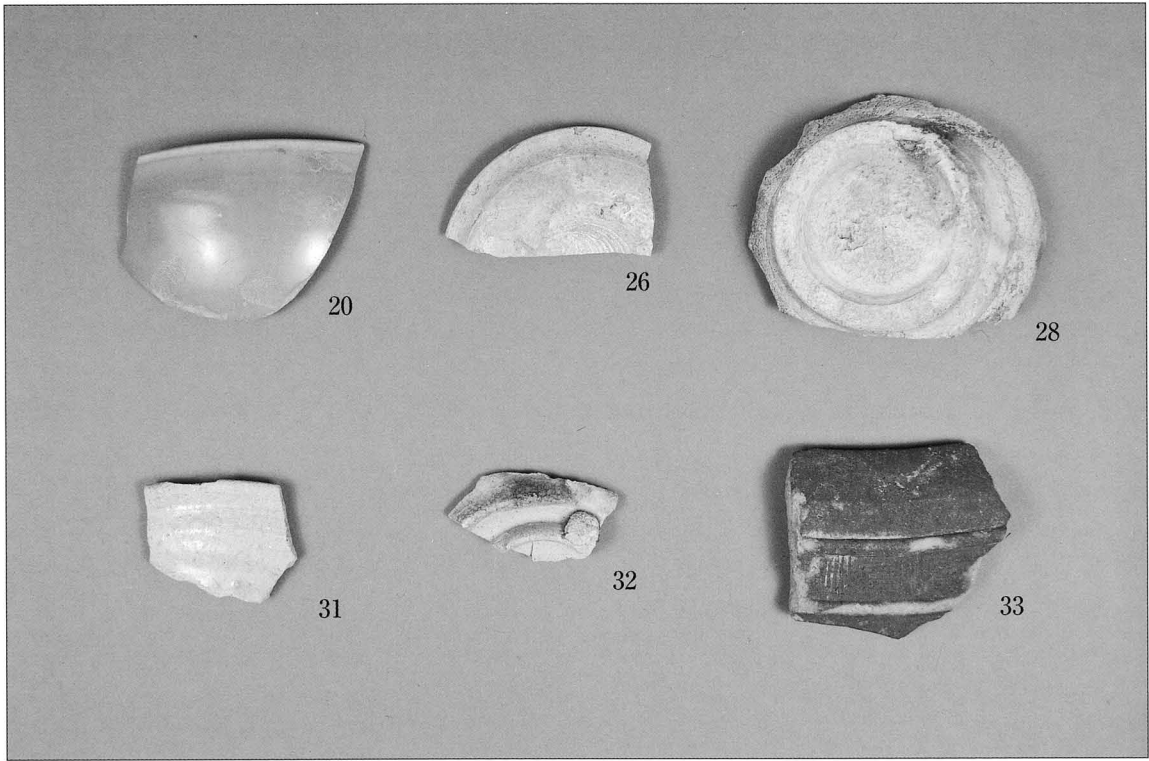
出土遺物



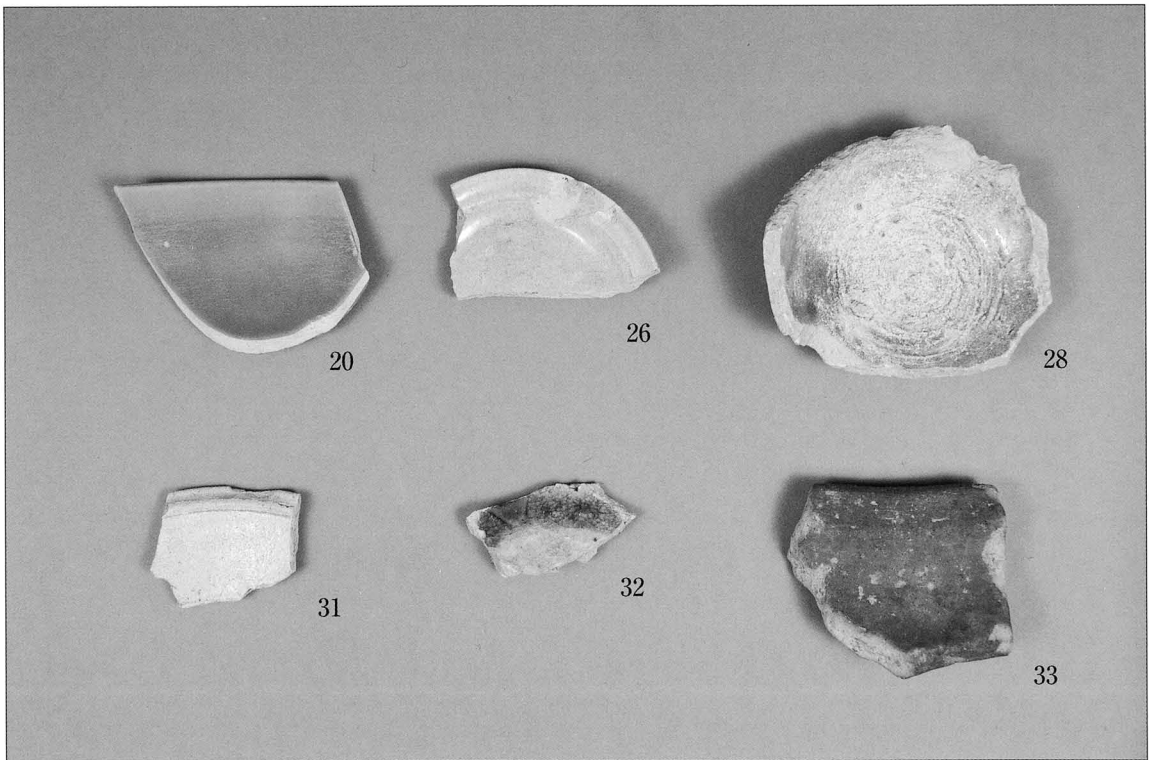
出土遺物



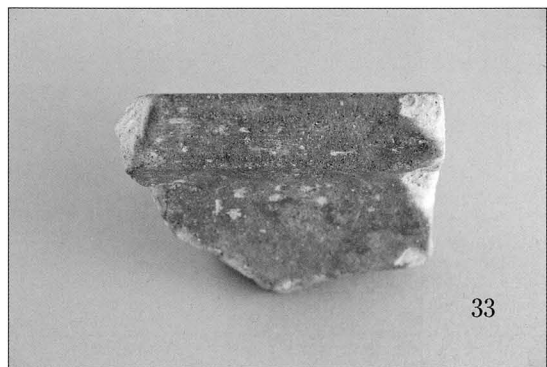
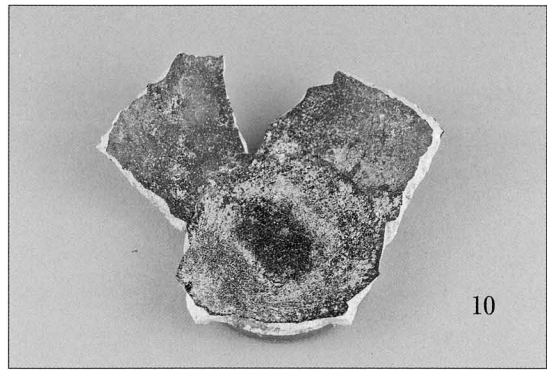
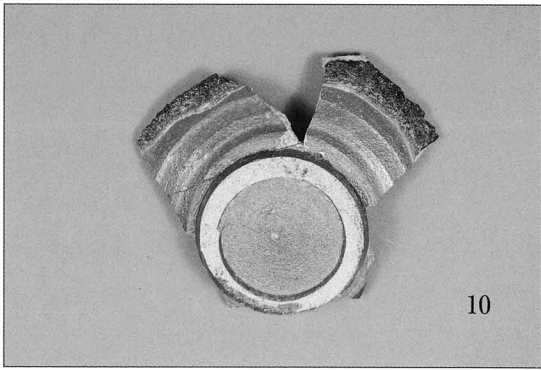
出土遺物

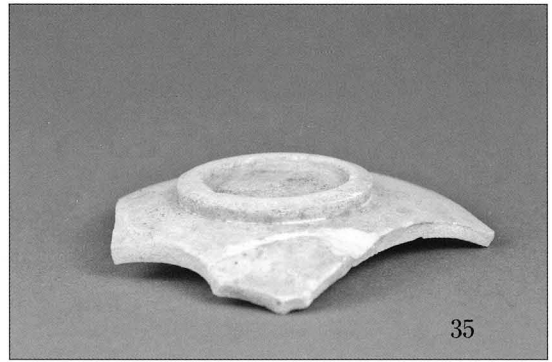


出土遺物



出土遺物





出土遺物

報告書抄録

ふりがな	たかみやじょうあと4							
書名	高宮城跡Ⅳ							
副書名	彦根市立高宮小学校校舎増改築工事に伴う発掘調査							
巻次								
シリーズ名	彦根市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	49							
編著者名	田中良輔							
編集機関	彦根市教育委員会 文化財課							
所在地	〒522-0001 彦根市尾末町1番38号 TEL 0749-26-5833							
発行年月日	20110331							
所収遺跡	所在地	コード		世界測地系		調査面積	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
高宮城跡	彦根市 高宮町 2391	25202	140	35度 14分 1秒	136度 15分 29秒	763.5 m ²	20100408 ～ 20100528	彦根市立高宮小学校校舎の増改築工事。
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
高宮城跡	城館跡	中世	掘立柱建物 溝 土坑 柵列		土師器 輸入陶磁器 古瀬戸			

彦根市埋蔵文化財調査報告第49集

高宮城跡Ⅳ

—彦根市立高宮小学校校舎増改築工事に伴う発掘調査—
平成23年（2011年）3月発行

編集・発行：彦根市教育委員会文化財課
彦根市尾末町1番38号
TEL 0749-26-5833

印刷・製本：ニホン美術印刷株式会社
岐阜県大垣市西外側町2-15

SITE OF TAKAMIYA-JYO

March, 2011

Hikone Educational Bureau
Cultural Asset Division